

教育  
小說  
公民

後藤  
宙外  
著



特 72

81



行發館朋有

301623-001-7

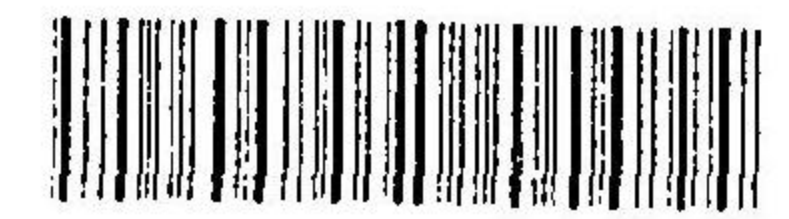
特72-81

公民

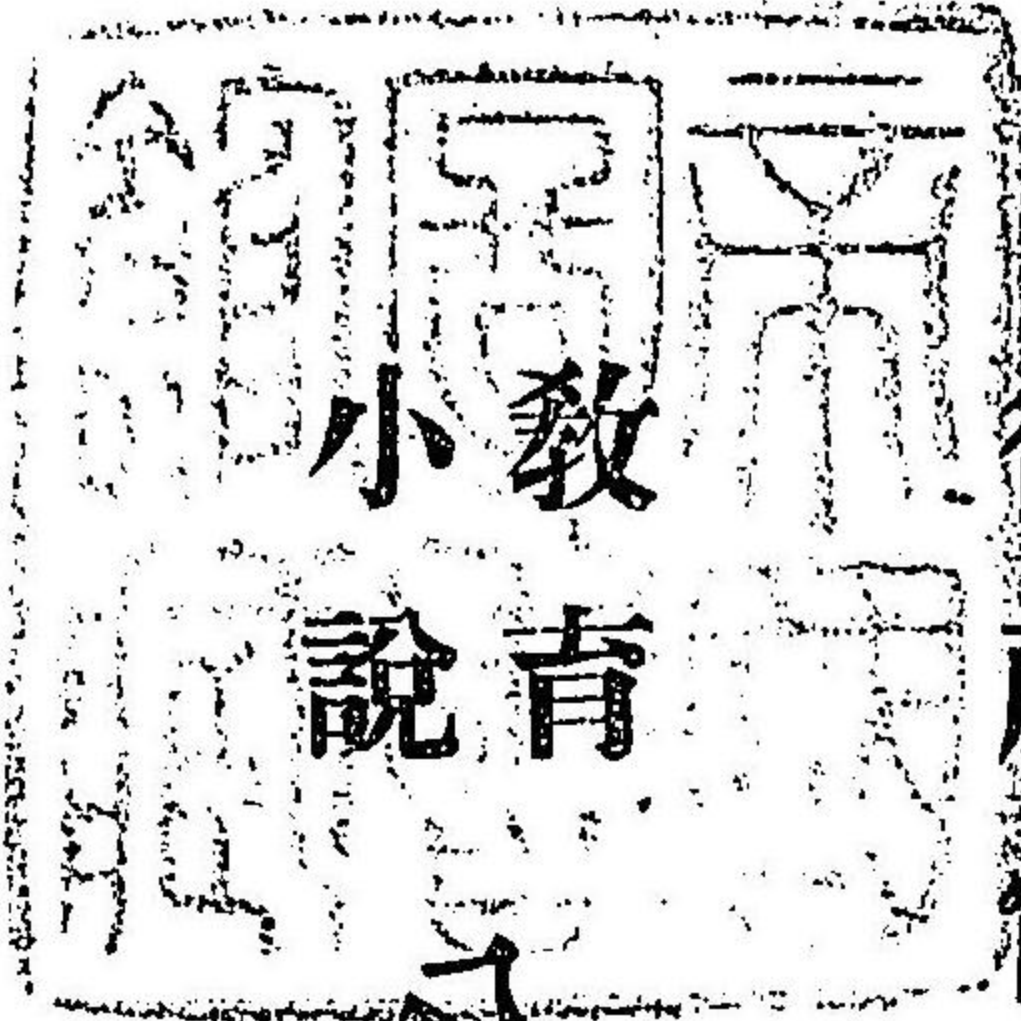
後藤 寅之助 / 著

M43.3

AAE-0001



特  
21



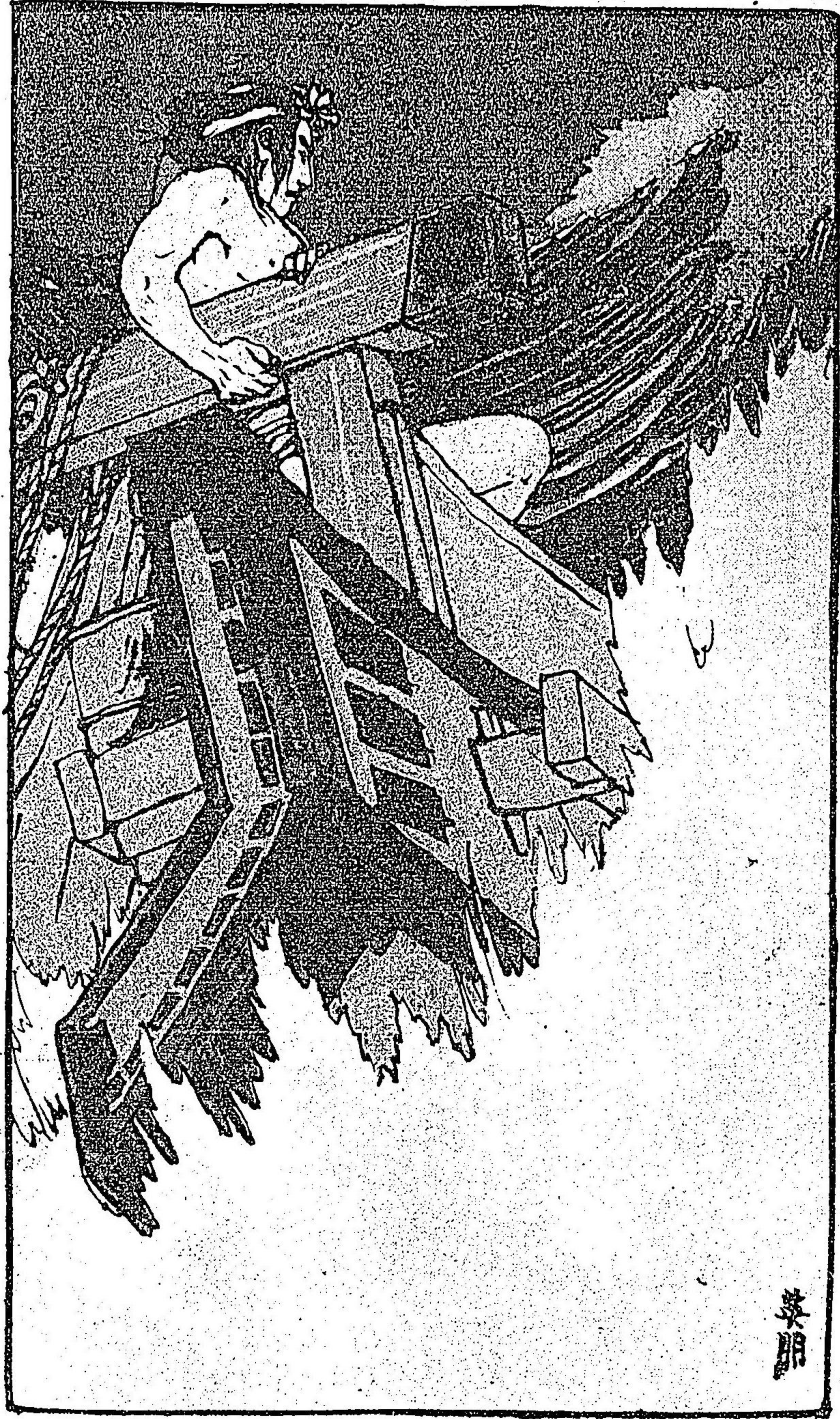
後藤宙外著

公民全

東京

有朋館發行

明治  
43. 3. 16  
内交



## 序

この「公民」は余が舊作なれど、此の度あらたに「教育小説」と銘打つて、再び世に問ふこととなつた。斯く新装して公けにするに至つたのは、全く畏友臨風笹川種郎君の懇ろなるお勧めに依つたのである。臨風君は多年教育界に立つて令名あるの士で、教育上の實驗と識見との豊富なるは、世の既に知悉するところである。此の人が「公民」を以つて「教育小説」として世に問ふに足るものであると、誠心から推薦下さる上は、余は更に辭すべき理由を見出さない。且つ直接この書の出版に就いて、斡旋の勞まで執られたのである。多少なりとも此の書に依つて小學及び中學程度の學生、その他の青年に裨益するところがあ  
るならば、著者が望外の幸である。而して是れ皆臨風君の賜物

と云はねばならぬ。尚この書の刊行については、勝屋錦村君の御盡力と、挿畫に特別の骨折りを爲て下された、緒崎英朋君の好意とにお禮を申上げる。

明治四十三年三月

著者 謹識

目次

第一	村有林	一頁—一三頁
第二	人の隙	一三頁—一九頁
第三	多事	一九頁—二九頁
第四	秋より冬	二九頁—二九頁
第五	ふる財布	三九頁—五六頁
第六	驕婦	五六頁—六六頁
第七	唱歌	六六頁—七三頁
第八	洪水	七三頁—七九頁
第九	臨終	八〇頁—八三頁

以上

公民

後藤宙外

第一村有林

村有林

(1)

「何うだい、素晴しく伸たてねえか。」  
心地よく伸揃うた杉木立の小徑に佇立んで、目通り三尺餘、枝下六七間もあらうと云ふ、木々の根方より梢の方に見あげ、老顔に微笑を浮べたのは、村で親方様と立てられる紀知右衛門である。

「然だなんし。此の位揃って伸のある木は、己等此の近所て見た事ア無えなんし。」

老人の手を引いてゐる附添ひの辨藏が合榧。老人は片手の杖も顛へて、紐附の草履の脱げかゝるを、氣に爲ながら靜に歩む。折々枯枝などに躓いて

轉まびさうにも見みえる。

『此この林はやしはなア辨はん藏ざう！』

『はい。』

『己おれが三十二さんじふにの年としに、村むらへ苗木なぐさ呉くれて植うゑさせたのだが、先まア見みろ！這こん麼な立う派はな林はやしに成なつた。』

『旦那様だんなさまが植うゑて呉くれさつたのだと云いふ話はなしは、豫かねて老人としより達たちからも聞きいて居ゐりやした。』

『然さうか。知しつてたのかい。』 微ほ笑ゑみながら復また立たち止とつて、紺こん線せんの枝えだ、深しん碧ぺきの影かげ、重かさなり合あつた物もの凄せいい、奥おく深ふかい、陰いん氣きな天てん井じやうを仰あはいで、坂さかの上うへから吹ふきおろす朝あさ霧きりを顔かほに受うけて、息いきを入いれた。

『己おれは當たう年ねん七十六しちじふろくになるから、エ、と……』 鳥ちよつと渡かかん考がへ、『丁ちやうど度なん何なんだよ、植うゑたてから今いま年で、四十五しじふご年ねん目めに當あたる勘かん定ぢやうだなア。月つき日ひの過たつのも早はやい、が斯かう成せい木ぎして見みると、林はやしを育そだてるのも存ぞん外ぐわい長ながくは掛からねえもんだ。』

『四十五しじふご年ねん目めで御ご座ざりやすつて？ 隨ず分ぶん年ねんを食くつた……成なる程ほど、その位くらゐ過たたねえぢやア、斯かう立う派はには成なりやすめえ。一ほん本ぼん三りやう兩りやうや五りやう兩りやうがものは有ありやすべえよ。』

『然さうよ。却かえ々々大たいした村むらの財ざい産さんに成なつたよ。斯かうやつて、此こ所ところを通とおつて見みると、實じつに快こころい心こころ地ぢで、何なにの位くらゐ樂たのしみだか知しれねえ。孫まご兒この手て足あしの伸のびるのを見みると同おなじやうなもんでな。』

『爾なんだべなんし。』

『お前まへ達たちも心こころ掛かけて、屋や敷しきの隅すみや空あか地ぢでも有あつたら、屹さつ度と何なにか植うゑて置おくが宜よい。老とし年ねんになつての樂たのしみは、此この上うへは無ないのだからな。お負まけに子こ孫そんの寶たからにもなる。』

『爾なんだなんし。心こころ掛かけて、旦那様だんなさまの眞ま似ねを爲して見みやせうし。』

『其それが善よい。何なんでも長なが年ねん心こころ掛かけてせえ置おけば、出で來きねえなんてい事ことは無ないのだからな。』

(5)

林 有 村



民

公

(4)





『はう。』  
 『お前、那の鳴澤の作太様を知つてるだらう。己の家へ折々来る、肥満た老爺よ。』

『知つて居りやした。』  
 『那の男は又、一風變つてゝな。骨董類や盆栽などが好で、大金を使ふのを何とも思はぬ質だから、何時も己と腹が合は無えのだが、先頃も来て、頻りに盆栽の自慢話が始まつてな、己に斯う云ふぢやア無えか……。』

『はい。』  
 得意に語り續ける主人が危い歩調に辨藏は氣を配り、扶けながら聴者になつて、徐々坂の方へ進むのである。紀知右衛門は一段と語勢を強め、  
 『作太殿の説も面白い。盆栽の味を知らない人物は、何うも俗で宜け無えから、些と此の道にも凝つて見なさるが宜い、と己に勧めた。アツハ、己も却々負けねえ。唯一言で老爺を降参させて遣つたのよ。』

辨藏は其の自慢の所謂一言を聞かうとして、老人の方へ顔を向けた。

『は、ア、爾で御座りやしたか。』

聞かぬ前に、感服の聲を擧げて迎へた。老人は満面に得意の色を浮べて、利く方の手で杖を擧げて一揮ふり、

『私も盆栽は好かねえ事もねえがの、小型のは嫌ひだ。只今自慢のが一鉢ある。御覽に入れよう！サア見て呉れ、と云つて二階の障子をずつと開放して、黙然で、斯う……杖で指示す態を爲て、』

『此の林を指した。溜らない。奴うむと云つた儘、言句が無かつたよ。ハツハ、。』

『それぢやア、作太様も降伏だつたべし。此の位づない植木鉢を樂んでる人は外には有りやすめえし？』

『先ア有るめえなア。』  
 再び林を仰ぐ途端、杉の根に躓いて、蹣跚と老人は倒れかゝる。手代の辨

藏は狼狽して支え起こした。

『大、でえ……大丈夫だ。アツハ、』

踏み堪へて、やつと腰を据え、左の手をぶらんとして爲せて、動かない方の足を、引摺る様に爲て、肩を歪めて眉を擡めた。

『何處も痛く爲なされたは無かんべなんし』

辨藏は氣を揉んで、勞りながら肩を延べて縋らせた。

『えッヘッヘ』と押出した様に、老人笑つて、『餘り自慢に實が入つて、

飛だ失策を眞似を爲た。これだから氣を附けねえと宜け無え。自慢話も過

ぎると、罰が靦面だからな。』

辨藏の肩に凭つて、靜に緩い坂を上つて、件の杉林を眼下に見おろされる闊いた小山の郡道に出たのである。煙草屋、駄菓子屋などあつて、荷馬車位は折々通る往還で、村への降口は羊腸の急坂になつて居る、坂上の茶店の前に出た。緒面の婆さんが、爐端からお辭儀を爲て、

『旦那様！お早う御座りやす。』

『阿徳婆！早いな。何うだ、店は繁昌するかな。』

『はい。何様にか遣つて居りやすだよ。お前様！些と休んで往かしやらねえか。』

『些と休まして貰はうかな。』

紀知右衛門は辨藏と並んで店へ腰を掛ける。婆は瀝茶、蘭蓆、煙草盆などを薦めた。

『毎朝よく先ア、斯う早く、お散歩になるこつて御座りやすだよ。己等は

驚歎して居りやすだよ。長命を爲さる人は、何處か違ふもんだと思つてね。』

『何うもな、朝飯前に外へ出るのは、己の癖で、若い時から、一日も缺かした事が無えのだが、此の節はお前、この通り半身不随意の軀になつたで、何分懶怠になつて宜けねえ。餅し畑や林を見巡つて來るとな、奈何にも快い心地でな、今以て止められないのし。ハツハ、』

「お前様見たやうに、嚴格した方は外に誰が有りやすべえッて、誰でも喫驚て居ねえ者は無えがらし。お健康の方は何う爲なはりやした。」

「己の病氣か。何もう年だからな。癒つたら儲物で、先ア〜死ぬ時分が来たのよ。ハッハ、」

外の客が店へ入つたので、婆との話は途切れた。七八歳から十二三までの學校通ひの子供が、三四人づゝ隊を爲して来た。何れも立停つて、脱帽して、恭しく紀知右衛門の前に黙禮して通る。此方は微笑みながら、

「うむ。皆人よく精が出るな。今に立派な人になるぞ。勉強しなくッては宜けねえ。」

太い優い聲で、褒めて遣つた。子供等は喜色を帯びて、一齊に勢よく坂を駈下りた。

茶屋が簷頭の天竺桂、日蔽めかして靡いた枝の葉を飜れて、朝露折々ほとりと、摺鉢に植ゑた夜叉柄杓の上に轉ぶ。斷崖下に近い木立に斑の靄、村

の茅屋ちらほら。朝影一段と照榮る白壁の土藏の邊に、鶯鳥の聲ゆたかに響く。それより先は萬頃一碧の青田、桑畑、中をうねり流るゝ長瀬川は、宛然白布を曳けるやう。紀知右衛門は澁茶啜りながら、其邊を眺めると、十四五から二十三四の頃まで、殆ど毎日のやうに、此の坂を炭や薪を脊負たり、輕子籠を擔いだりして、昇降に惱んだ昔を憶ひ起す。彼方の川岸に續く廣い桑畑の上に目を移しては、三十餘年前の飢饉の際に、自分が主と爲つて、貧民に賃錢と食とを與へる爲に、荒地を開墾させた、其の功績現はれて、今は莫大な村の富源に成つたのを考へると、謂はれぬ快い心地で、吹上げる朝風にも、他の知らぬ薫しい香氣を載せて来るやうに覺えるのである。旅稼の職人らしい男が、媼と頻に當年の不作、不景氣、物價の割高などの噂を爲て居る。今まで土間に睡て居た斑犬は、件の男に頭へ吹殻を落され、喫驚躍起きて、鬨の外へ駈出ると、直にけりりと爲て、脊を丸く爲て欠をした。旋て尾を掉つて、紀知右衛門の膝に頭を擦りつける。老人

は靜に其の頭を撫てやつた。

「サア徐々歸らうかな。辨藏！」

杖を採つて立ちかゝる。

「はい、参りやせう。」

後から抱へる様にして、扶け起した。

「婆様 飛だ邪魔を爲やしたぞ。些と湯にでも入りに來ないか。」

「はい、有難う御座りやす。何時も御粗末上げやして、濟まねえなんし、

旦那様？」

「否。毎朝休ませて貰うのだから、搦はれては此方が困る。」

「では、靜に御座らっしゃりやし。」

「ぢやお前、遊びに來さっしゃれ。」

「ハイ。」手代の方へ向いて「辨さん、お前茫然爲てゝは宜がねえもんだ。

ソレ緊密旦那の手を引張つて、顛倒ばねえ様に、氣を付て進ぜるもんです。」

「然だなア媪様、お前よく氣の附く人だ。有難い。序に飴玉の一つも驕ると、尙善い媪様だ。」

「アッ！あれだ。口の耗らねえ、慾の深え、氣の利かねえ男だなア、お前は。村の旦那様は慈悲深いから、お前がやうな者も使つて居て下さるだア、能く氣をつけて働かッせ。ハッハ、ハ、ハ。」

辨藏は説破られて、少し辟易いた狀。紀知右衛門は笑つて、

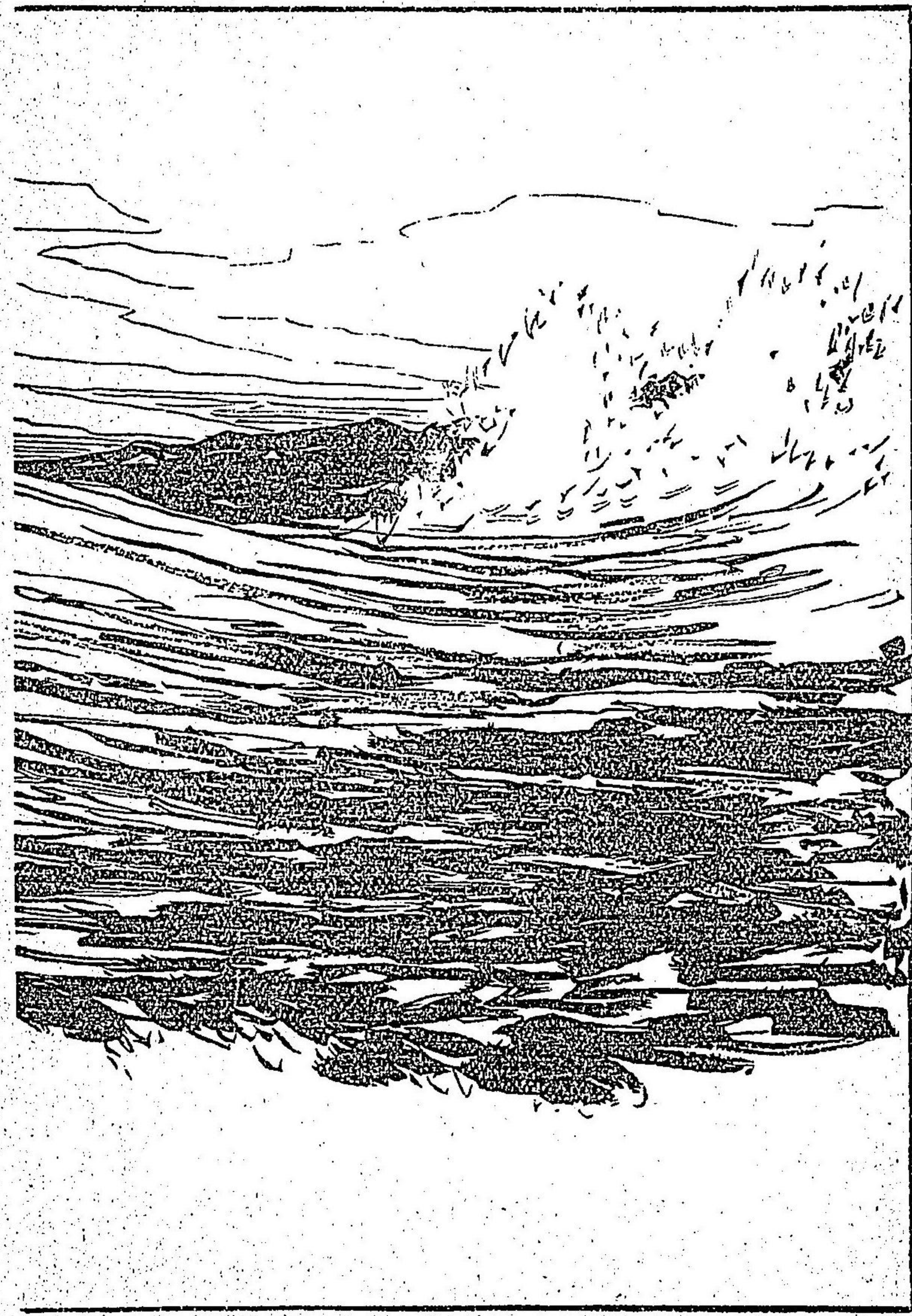
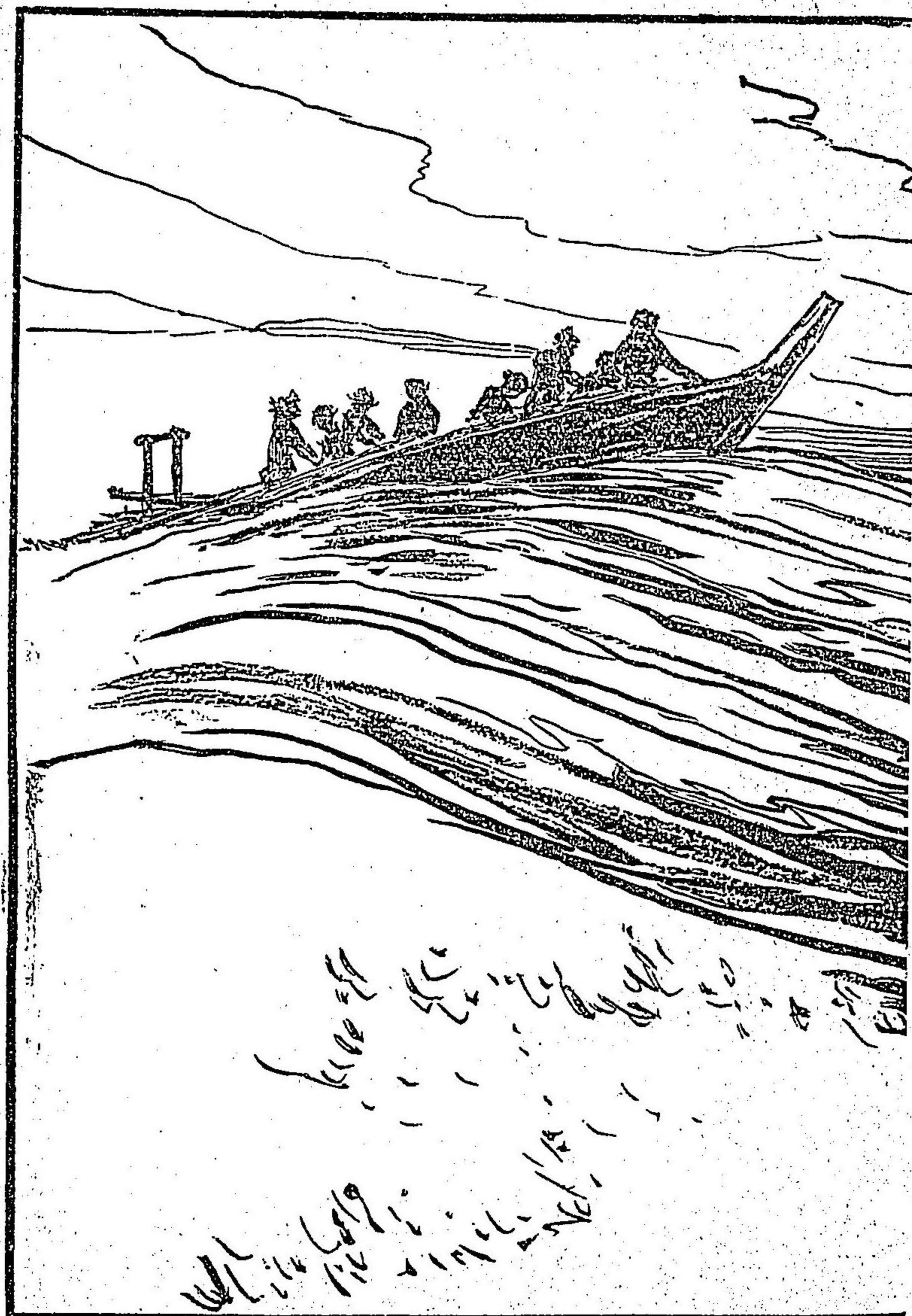
「辨！媪様にやア敵はねえな、ハッハ、ハ、ハ。」

「ハッハ、ハ、ハ。」

辨藏も詮方なしに、接對笑を爲たのである。二人は靜に坂を降つて、村中の方へ歩を移した。

第二一人の噂

紀知右衛門は姓を赤垣といひ、此の赤埴村第一等の富豪家で、又慈善家、



徳望家である。けれど彼はもと極貧の百姓の家に産れて、二十三四歳までは、日雇取、駄賃取、行商などで可哀な生活を爲て居たのである。其の頃から、剛情な、膽の太い男で、勤勉で熱心であつただけは、郷黨の噂にも上つて居たけれど、別に傑れた人物と云ふでは無かつた。その後北越の海濱へ出稼して、七八年が間は生死の音沙汰も聞いた者なく、何處に何を稼いで居るとも知れなかつた。だが、三十の年に二千以上の金を遺して歸省した。此の間彼れは遠洋漁業船に乗込んで、必死に働いて來たのであつたと云ふ。妬む奴等は海賊の手下にても爲つて、金を攫つて來たのであらうと云ふが、彼れの性行を信ずる者は、爾は思はぬのである。歸郷後も昔の儘の筒袖に股引、同じ破れた茅葺の、煤臭い親讓りの家に住んで、糶半分の疎食に甘んじ、此の地方が森林に富んで、賃銀の太甚廉いの目に着け、未人の噂も無かつた遂御維新後に、寸燐の製造を始めた。世間が漸々西洋好に爲つて、蠟燭が高價に賣れる頃に、極めて廉く製造したので、需要が

却々多くなり、事業は擴張される、収益も随がつて多くなる。仕事の無いのを啣つ地方に、職を人々に與へたので、自然村の尊敬も得た。運のよい時は又格別なもので、當時は世の擾亂の後を承けて、地價は非常に廉かつた。因て將來有利の見込があると考へ、遊金を割いては近地の山林田野を追々買占めた。此の外木材業、薪炭業をも傍ら營んで、總て成功したのである。彼れが成功の秘訣はと、問ふ者があると、別に妙策を用ひた譯でなく、世間普通の忠實熱心と勤儉と、能く人を知つて、能を用ひ、人に任じ、人に報ひる事を忘れなかつたに於てである、と答へて居る。二十餘萬圓の資産と云へば、都會では僅少なもので有らうが、此の山間の僻地で、一代に斯う貯蓄し得たのは、實に異例である。のみならず、彼れの性行も、些と尋常の金満家とは變つて居る。『悪く云はれる中は樂みて、譽られる家は金は溜らぬ』などと云つて、酷薄な事得意とするのが世間の成上者の通性であるに、彼れは餘り不人望な所業も無く、何時の間にか今の位地に進ん

だ。憎まれぬも當然で、彼れは自活に十分の餘裕ある身分になつた頃から、常に村の爲に色々盡して、公共事業に投じた金は却々尠くない。村林の經營、その他の開拓殖産の業や、貧民の救助授産の設備にも力を竭し、赤埴小學校の如きは、村民の子弟教育の爲に、獨力で立派に維持して居るのである。賄賂で名譽職を買つたり、高利貸の罪亡しに俄に慈善を誇耀かす手合とは、幾等か違ふ所があるらしい。彼れは殆ど文盲と云つて宜いのであるけれど、折々味のある言を云つて、髯のある幫間等を凹ませる。或お出入の縣會議員が「富士の山程金を積んでも、崩れずに居た長者は昔から一人も例のない事だ。己の金を儲けるのは、無益に使ふ奴の手から取つて、役に立てる人物に渡す迄の間繼だ、暫時預つて遣る分の事さ。金は天下の寶で、己一人の物とは更々思はない。と紀知右衛門様は仰有る。實に高尚な氣象の人で、奈何にも感服致す。」など、觸れて歩いたのを、當人が聞いて、藥罐頭をするりと撫で、「いや、はや、飛でもない。那樣ことは根から

嘘だ。私に油をかけるにも程がある。役に立てるくで、詰掛けられては大變だ。人の出来ねえ苦勞して溜た身代、さう安く人手には渡されないが、妾を持たうと云つても、己がやうな蕃瓜老爺を可愛がる女もあるまいし、何か道樂が無くては、折角金を溜めても樂みにも爲らず、充らない譯だから、帳合ばかりの樂みにも飽き果てたので、蒼蠅がられながらも、村の事に世話を焼いて見たくなるのさ。今の若い者は利根だから油斷がならない。己を豪い事に祭りあげて、今度来て又金貸せか。アツハ、。と云つて居た。當人の意中は分らぬが、某議員の説程でもあるまいけれど、幾等か彼れの行ひには、爾いふ影の微見える氣味の爲ないでも無い。何しろ却々食へない老爺に違ひない。

第三 多 事

十二疊の茶の間、尺二寸の春慶塗の鑑長押、四枚の樺如鱗木理、縁黒の帯

締戸、これも光澤麗しい春慶塗で飾銀犇と打揃べたのが正面、これに添う  
 て北縁の方に、要箆筒、帳棚、茶箆筒までづらり駢び、楣間には雄健な筆  
 力で、大の一字を樺板に彫凸た、丸い額が懸つて、右手の長押には螺鈿干  
 段巻の手鏡、薙刀、檜の棒など厳しく飾つてある。帳棚要箆筒の前が主人  
 の席で、縁側に向つて、一脚の嚴疊を抽斗澤山な樺の塗机を控へ、前には  
 二尺五寸の圍爐裏を切つて、磨竹の自在鉤に、南部の鐵瓶が湯氣を沸騰げ  
 て居る。斯う小城廓とても云ひさうな構造の中に、木綿大縞の座蒲團の上  
 に少し舩を崩して斜に座を占め、嵩高な帳面を開いて、鼈甲縁の大眼鏡越  
 しに、頻りと何やら吟味して居るのは、主人の赤垣紀知右衛門だ。燼を隔  
 て、同じく縁側に向つて、二脚の机が並び、主人に近い方は禿頭の斜眼  
 の番頭文兵衛、次に座つたのが手代頭の辨藏で、何れも忙しさに算盤を  
 弾いたり、書物を爲たり、殆ど暇のない有様。紀知右衛門は帳面から此方  
 へ向直つて、天稟の柔和な眼を文兵衛の煌く頭へ注ぎ、廣い額に繁く疊ん

だ皺を少し動かし、

『文兵衛どん！アノな。』

呼びかけて、不自由な左の手を右で持添へて、歪んだ膝の上に置直した。

『はい。』

文兵衛は禿筆を鳥渡耳へ挿んで、ぐるりと膝を廻して、主人の方へ向いた。

『アノな。久助が地境苦情の一件よ。彼件の返事は何とだつた。瀧田さん

から、先方の様子を聞いたらうな。』

『ハイ、聞いて置きやして御座りやす。』

『フム、然か。此方の調査や圖面も見せて來たのだらうな。』

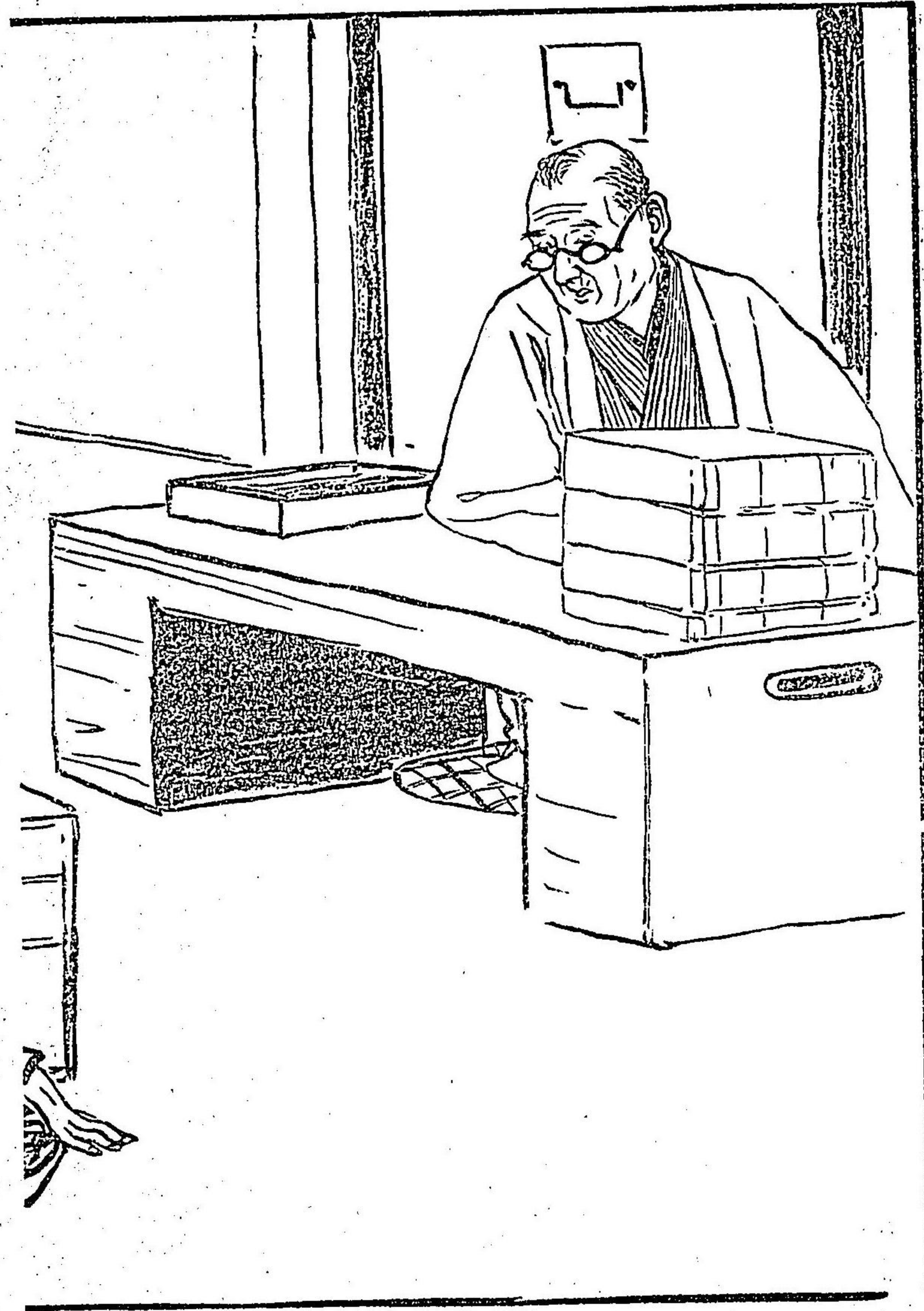
『詳しく見せて、色々説明けて聞かせたさうで御座いやすが、到底駄目でせ

うと、瀧田さんは言置かれて参りやした。』

主人は暫時黙考の舩で、唯『フム。』と云つたばかり。眉を少し擡めた。

『何しろ、先方の申分は暴で、一向理窟も何も無いので御座りやす。役場





の臺帳が改正の際に、誤つた儘に爲つて居やしたのが此方の落度で、尺杖を入れて見たところで、山林の事ですから、雙方の券面ともに反別が合つて居ません。其所へ奴は附込むので御座りやす。」

「然か。古いことだし、己も那樣ことが有るとは思はねえて居たから、吟味も今まで爲て見なかつたのが悪かつた。朴か何か境木が有った筈に覺えて居るがな。」

「それは確に御座りやしたの位無いので御座りやすが、彼奴が誰も知らん間に、伐倒して、根まで掘つて了ひやしたのらしう御座りやす。」

「ぢやア先方は何が境標示だといふのかい？」

「先方は前の村道の出口に、柳の大木の有るのを幸、これが境木に相違ないと強辯るのださうで御座りやす。」

「幾等言ひ聞かしても承知爲ないのか。」

「始めから詐僞で取る意で巧んだ仕事で御座りやすから……。」

「然かな。實に困つた奴だな。其の位他の地面が欲しいなら、稼いで金せえ拵へりやア、己は何時でも快く譲つて遣るのに。」

「否。尊者、稼いで錢を溜める位の料簡がある奴は、那樣悪策は爲やせんから。」

「それは爾に違えねえ。無代で他の地面が欲しいには困つた者だ。ハツハ。」

「一鉢怠惰者で、狡猾い性分の男で、村ぢやア評判の札附に爲て居りやす。」

「詮方が御座りやせんから、瀧田さんに頼んで、裁判に願ふより外手の着けやうが有りやすめえし。」

「先ア結局は、爾する分の事だが、可憫さうな男だな。幾等か有る資産も、訴訟入費になつて、辯護士や何かの腹を肥す迄だらうにな。畢竟隣村へ浪人を一人拵へるやうなもので、實は己も面白く無いが、無理な主張に負け置いては、自然側の爲にもならねえから、棄て、置く譯にも往かずなア。」

「何りして、那の儘になど爲て置きやしては、其れこそ大變だなんし。「赤垣の親方が、己の地面を盗む意で苦状を言出したが、敗公事と見て、手を引いたなど、言觸して歩くに定つて居りやす。」

「眞逆、彼奴が爾いつても、誰も己が那樣ことを爲たと思つては呉れもしまいがな。」

力ある口を結んで、嚴疊な威嚴のある躰を少し反して微笑した。

「それは誰も那樣ことは、眞實とは思ひも致しやせんが。彼を免して置きやしたら、増長して、今後何様悪いことを爲るやら知れやせんし、側から又眞似る奴が出来ないとも限りやせんからな。」

「其所もあるてな……」小時考へ、「併し、さてく氣の毒なことだ。大儀だがな、お前、明日でも今一度行つて、己が言葉を傳へて呉れまいか。」

「はい。其れは參る分は何時でも參りやせうが……」

「明日でも行つて、斯う云つて呉れまいか。」

「はい。」

「己と法庭で争ふ意なら、詮方がない。だが爾なると、訴訟入費は何位かゝつて、暇は何れだけ潰れるか、其所も能く考へて見たら宜からうし、己の方では行る段になると、大審院でも、何處でも、行ける所まで行くのが家風だから、其所も覺悟の上で、行るならお行んなさるが宜いとな。」

「はい。承知致しやした。」

「それからな。唯土地が欲しいのなら、那樣事を爲すとも、持たれるやうに、相談も爲てやるから、序の時に遊びに來い、と爾いつて呉れ。畢竟定まつた金儲けの仕事がないので、自然那樣考へも起すのだから、彼方の料簡次第で、相應な所へも使つて、金も儲けさせて遣るから、今一度考へ直して見たら何うだ、と穩かに云ひ含めて見て呉れまいか。」

「はい。左様ですな。」文兵衛承服しかねると云ふ態で、頭をかしげ、「マア兎も角も、尊老の仰有る通り、明日行つて申して見やせうし。」

「先ア御苦勞だが、物は試験だから、行つて見て來れまいか。」

「宜しう御座りやすとも。」

後の方から辨藏が頭を突出し、

辨「彼奴はなんし、旦那様！」

「何？」

辨「悪い三百が後に附いてるさうで御座りやすから、幾等お慈悲を加へても

駄目で御座いやせうし。」

「然か。併し、なア辨藏、物事は行けるところまで、行つて見なくては爲

らんものだからな。」

辨「ハイ。」

「お前達のやうに、戸前を窺いたばかりで、裏戸の錠前が掛つてゐると、

早合點するやうでは、實に危険いものだ。盡すだけ盡しても見ないで、諦

めるのは早計といふものだ。手落は爾いふ所から出來てな、後で後悔する

ことにも爲るのだ。」

辨「はい、左様で御座りやすか。」

畏縮つて頭退込めて、算盤はちく。

「文兵衛どん！、ぢやア、明日行くことに決めて下さい。」

「はい。拜承りやして御座りやす。」

第四 秋より冬

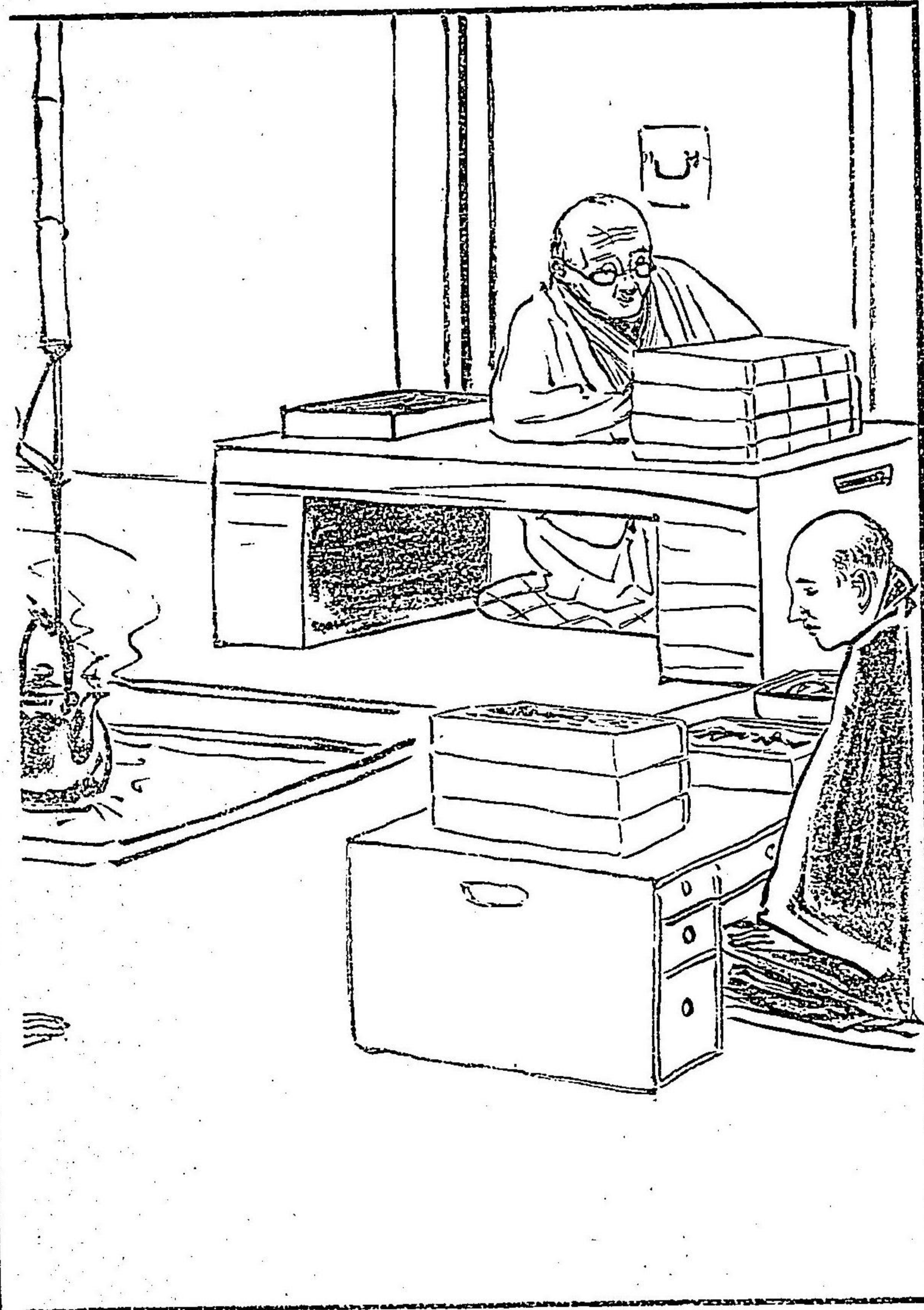
紀知右衛門は辨藏の方に向き、

「臺所に待つて居る落合村の人達を、此方へ呼んで呉れ。大きに待たせや

したと云つてな。」

「はい。」

辨藏は次へ立つて、其の趣意を傳へたと見え、六七人の百姓は疊の二三疊も隔て、端の方へ居並んだ。「はい旦那様實に好いお天気で、結構で御座り



やす、』と思ひくの挨拶。旋て上席の一人が頭を掻きながら伏目勝に緒を切つた。約んで云へば、昨年の不作で何れも飯米の道が塞がり、耕作に従事することも出来ない程の昨今の窮迫、實に申しかねる次第なれど、御憐愍を以て、當秋まで、利安で米を借りたいとの願意である。上席の者が述終ると一同頭を下げ、何卒、特別のお計ひで、何分お願ひ致したいもので御座りやす。』と聲を揃へての歎願。

『お、然か。成程、昨年は本村なども、随分酷い作だつたから、何人も困る譯だよ。』

主人が斯う應じた尾に附いて、又諄々と難儀の次第を、交代可哀はい調子で、軀を屈めながら訴へるのである。紀知右衛門は机に片腕を支へ、病氣の爲に不絶頭てゐる頭を少し傾げて、默聽して居る。

『右の譯で、何うも致し方が無えので御座りやすで、旦那様、何卒此の秋新穀の出來ます迄、一人につき十五俵づゝ、拜借仰せつけられてえもので

御座りやす。泣いても、笑つても、食ずには居られやせんので、實に是ればかりは困りやすでなア。』

と斯う結んで、鼻を擧りあげたのは、末座の馬面な男で。

『如何にも困ることたらう。借りたければ、貸して進ぜても宜いが……。』皆迄聞かず、一同『何卒、爾お願え申しやす。』と歡喜の聲を放つた。

『だがなア、お前達！』と抑へて、列座の顔を見廻し、『返済の法を何うするか、其れから先に決めるが宜いな。お前方が後で困るやうに爲ては、折角己が貸して進ぜて、却て苦ませる様な事では成らんからな。其所を豫め能く考へて見て下さい。』

『此の秋、新穀が出來ますれば、金直しになり、又米が御入用なら米で……』と三人目のが、口を開いたを皆までは聞かず。

『それは誰も爾思ふのだが、其れは何うも私の考へては、出來難からうと思ふ。普通の挨拶振は、此の秋新穀が出來たらばと云ふと、大きに至當ら

しくも聞えるし、通りも善い譯だが、何うも其れて返すと云ふは、其の時になつて困難しからうよ。』

百姓等は互に顔見合せ、眼交、私語、尻を突いたり、袖引張ツたり、内々大混雑の躰。主人は暫時黙して、彼等の内議を聞かぬ態で控へる。その中氣の早いのは、

『何様ことが御座りやしても、間違なく此の秋には……』と云ひかける。其の足蹠を窃と抓つて、

『マア待ちな。旦那様の云つて呉れさる所も、至當な次第が無えても無えのし。』と分別顔で、屈託したのも見える。

紀知右衛門の胸には、彼等が例年満足を收穫を爲ても、年中の生活に幾許も餘裕の無いのを知つて居る。八所借する奴は、八所共に、『此の秋』が抵當に爲つて居るのも承知で、躰の好い一時遁れの爲に彼等が樂みに爲てる『此の秋』には、最も苦まねばならぬ羽目に爲るのも觀破して居るので

却々這麼甘手には乘らぬのである。彼等は推返して再び『此の秋』を繰返す自信もなく、容易に密議の一決せぬ様子に愈々紀知右衛門が先見の動かぬ證據を與へる趣。

『何うだい、お前達。新穀で皆済の見込が睨と立ちさうかい？』微笑しながら一同の俯向勝な顔をづらりと見渡した。彼等は内々恐入つて居るらしい。

『秋は秋で、誰も同じことだ、それ〴〵收穫の遣場は今から決つてる様なものだからな。爾餘分の有らう筈も無からう。私はな、執達吏の手を借るやうな料簡なら、始めから、お前達に用達の意も無いのだから、餘計な世話も最初から焼いて置くのだが、……何うだい。外に分別が無いか。』

『實に、お慈悲深いお言葉で。』『何とか都合の好いやうに爲て、面倒見て貰ひてえもんで御座りやす。』など云て居るばかり。更に要領を得ぬ始末。今まで黙して帳合に餘念なく机に向つて居た番頭の文兵衛は、禿頭を擡げて、此方へ向き、

「我が口を出す幕でも有りやすめえが、お前達、斯う云つて、旦那様にお願え申して見たら、何うだい。」

「はいく。」と一同が文兵衛にお辭儀を爲て、宜しく頼むと云ふ眼色。

「秋と云つた所が、旦那の仰有る通り、誰も同じ事で、何も彼も百姓は一年の收穫時ばかりを的に爲てるから、爾は到底繰回しの附きやうがない筈。因で、私なら秋と云ふのを、冬と斯う願つて……。」

「はいく。」一同又疊に手をついて、平蜘蛛のやうに拜伏を爲た。

「冬の仕事の無い時に、何人でも手の有りだけ、此家の工場へ使つて戴くと、斯うして拜借を願つたら、何うて御座りやす。」

「それなら尙此の上も無い仕合せ。」何うか、番頭さんから、爾お願え申して下さらねべがなんし。」「旦那様、何うか其れでは、文兵衛様の云ふやうに爲て、お貸し下さる譯にやア、参りやすめえか。はい、お願え上げ申すで、御座りやすだて。」各人の思ひくの言葉が絡み合ひ、纏れ合つて、

喧々、囂々、殆ど誰が何を言ふのやら、區別が附きかねる。

「先ア爾各人が勝手に云ふより、一人づゝ願つて、其の通りて宜いとか、悪いとか、斯うする方が纏まり易からうから。」と文兵衛が注意を與へて、

「それに旦那様は御病中だから、お前達も氣を附けさらねえでは、宜けやすめえ。」と極めつけた。

「はいく。是れは實に悪るかつたなんし。」「己が云ふから、汝は黙しろ。」

「否や、己が云つてる中に、汝が口を出すのが善くねえだ。」などと、眩きながら、恐入つて、今度は誰一人口を開く者が無くなつた。我いへ、汝いへ、と譲り合つて、目張子といふ躰だらう。結局上席を占めた胡麻鹽頭の痘痕老翁が推薦されて、音頭取と云ふ役廻り。

「何うか、其では、番頭さんのお話通りに爲て、冬賃銀宛で、貸して貰ひ申してえもんで御座りやす。何分、宜しくお願え致すで御座りやす。」  
續けさまにひよこゝ頭を下げ、列座の同輩の方に向き、



「皆人、別に異存は無えべなんし。後で彼是あつても成んねえだから、外に分別の有る人は、言つて呉れさらねえでは成んねえ。」  
何れも異見はないと、口々に答へたのであつた。

「では、私も能く考へて、お前達の爲になる様に計つて遣るから、誰か明後日、一人で宜いから來さるが宜い。大勢暇を潰して、歩くには當らんから。」

「はい。何うか爾願ひやすで御座りやす。」

二三人口を揃へて、一同疊に額を擦附けるばかり。

「誰でも、其の時來さつた人に、手續も詳しく話して上げようし、證券の下書も拵へて渡すから、能く其れを見て、承知なら何時でも、米は上げることに爲ようからな。」

「はい。是れは有難う御座りやした。大きにお邪魔致しやした。」と忝しく一同が禮を述べて、番頭手代にまで、其れと挨拶を爲て引退つた。

入代つて、學校新築擔當の棟梁が來るかと思ふと、工場監督に住つてゐる長男の紀知之丞が、職工慰勞金配當の相談に來る。義捐金募集の者やら、用水争ひの仲裁を頼む者等も見えると云ふ有様。その應接の多忙しい、目紛しい事は、慣れぬ者の眼からは、驚かれる位。よく那の病軀と云ひ、老人で此の繁劇な事務の衝に、當つて居られると怪まぬは無い。醫者にも毎度靜養を勧められ、家政の事は他の者に一任するが宜からうと、親戚や家族にも屢々忠告を受けたのだが、性質で黙つて居られず、もう何うせ惜くもない年だから、息の續く限りは、退隱んで居て氣を腐らすより、思ふだけ働いて、死ぬ方が己の望みだ、とあつて、頑然應じ無いのであつた。例へば、紀知右衛門の昨今は、重傷を負うた老將軍か尙馬上に突立あがり、八面に敵を受けて奮闘馳突の餘勇を示す狀である。

第五 ぶる財布

紀知右衛門には四人の子があつて、總領の紀知之丞は最早五十幾歳、極温厚質朴な天稟で、乃父程の活才はないが、守成の任に當るには、間違のない手堅い一方の人物。これは村の中に工場の監督を爲て居る。長女は他家へ嫁して後死んだが、此の二人は先妻の同腹で、次女の阿登和は養子を貰つて、隣村に分家。季兒の紀知次郎といふのは、當年二十七八、鳥渡才子肌な男で、散々蕩樂の上に、親兄弟に限ない迷惑を懸け、郷里にも居られぬ身になつて、多額の借金と妻子を遺し、方々今も流浪して居るが、折々金の無心や、不義理な借金の尻拭を、阿父や義兄の所へ持込んで来る厄介者。この又厄介者が可愛くて、殆ど目の無いのが後妻の阿塚で、紀知右衛門とは二十幾歳違ひ、娘程若い不順氣の辯難家で、折々紀知次郎の事に就いて、老夫紀知右衛門に嘯てかゝる。因て世間では、阿塚を病犬老婆と綽名して居る。良人へ嘯てかゝる位だから、雇人や出入の者が、牙を折々見せられるのは言ふまでも無い。那の位世間から褒られ、那の身代を一代に

拵へる程豪い人だが、悪い後妻持つて、年の上に耻かゝせられる旦那殿が氣の毒だ。」と村の者が寄ると觸ると噂である。「那麼、因業老婆に、輕侮れてゐる旦那も旦那だ。勿々と、追出して丁へば宜いのに。茶飲友達が戀しきやア、幾等も己等が世話して遣んべえ。エーラよ、作太が媪様！、お前旦那の唄様に往く氣が無えがよ。」など、氣の早い手合もある。「爾お前等が言ふがの。孫迄出来た子供がある上に、那の年を爲て、今更離縁も爲られぬえで無えか。流石は豪いお方だ、大概の者の堪忍ならねえ所を堪忍して、反抗ずに黙つて御座らっしゃる。」と云ふ者もある。彼れに拔擢されて、意外の優遇を受け、彼れが私立の學校の校長を勤めて居る、神部氏の如きは、「赤垣翁の家庭の不調和を非難する者もあるけれど、我輩などから云はせると、大人物には往々斯う云ふ例があるもので、大した疵にはならぬ。那の人の眼から見たら、家庭の意味を擴充めて、一村を以て自分の家のやうに、思つて居られるのかも知れないのだから、妻君の不從順や、次男の不

身持位は、大した苦痛とも思ふまい。又これが爲に、那の人の徳を煩はすにも足るまい。日月の明を以てして尚蝕すること有りだから。」と言つてゐる。此の翁の崇拜者の言だから、七掛位に聞いて置くが正當なのかも知れぬ。

紀知右衛門は病を推して、内外の劇務を一身に引受け、半身不隨意の老軀に有りながら、責任を人に譲ることを嫌ふ性にて、過度に心身を勞したので、此の秋の始から痼疾の中風が一段重くなつた。流石負けぬ氣の老翁なれど、大概の事は伴紀知之丞に任せて、一室に閉籠らねばならぬ境界に陥つたのである。軀の方は起臥も自由にならぬ程では有るが、好運な事には精神には少しも異狀なく、常の如く健全である。彼れはもう死期の近くなつたのを覺悟して、學校再築の落成を成可く取急ぐやうにと、病床の中に在りながら督勵して居る。此の赤埴村前途の致富策改良案なども定めて、重なる人々に口授し、此の事業の基本金の一部として、自分が財産の何分

一といふものを、寄附すべき約束をも結んだ。家憲も定め、遺言状も認めて、手筈の裡に収めてある。遺憾なく自分の志しを爲し盡して、靜に死の迎へを待つのである。

嗣子の紀知之丞と、後妻の長女阿登和とは、交代枕頭に侍し、二名の看護婦をも附添はせて、晝夜怠慢なく看病に心を盡して居る。

或日、午前九時頃の事である。秋の空麗かに晴れて、和かな光病室の障子に上つて、植込の木影暖かなる漣波を潑揚げ、ゆり寄せ、藥の香氣靜にして、白菊神農の古軸の前に鮮麗なる時、紀知右衛門は憔悴れた顔を擡げて、力なく枕に凭つて起きやうとするのであつた。阿登和は心得て後へ廻り、

「阿爺さん！お起きなさりやすか。」

「あゝ、今日は氣分が大層よいから、些と坐つて見やうと思つてな。」

「ぢやア、斯うなさるが宜う御座りやせう。」

と夜着を疊んで倚懸れるやうに、後へ支物に爲て遣り、寐衣の前をも直し

て遣つた。

『よし、有難う！』

傍に居て阿爺の蹙れた顔を眺めて、情なく思つて、恍然見惚れた紀知之丞は、曲録を引寄せて肱を掛けさせ、

『昨日あたりよりは、大變に顔色も好くなつた様で御座りやす。』

『然か。今日は近頃になく気分が快いからな。』

と云つて、阿登和の方へ向き、『あのな。少しお前達に、話して聞かせたい事があるのだから、鳥渡お前彼方へ往つてな。看護婦等に少し休息してから来るやうに、爾云つて来て呉れまいか。』

『はい、ぢや爾云つて参りやせうし。』

『あゝ、大儀だがな。阿塚は何を爲てるのだらう。相變らず、雇人等を叱り飛してゝも居るのか。』

『阿母さんは、今鳥渡、緑川さんへお産のお祝儀に往かれやした。』

『フム。其れは丁度好い鹽梅だ。折角己が話を爲てる所へ入つて来て、下らない文句を附けて怒罵られては困るからな。』

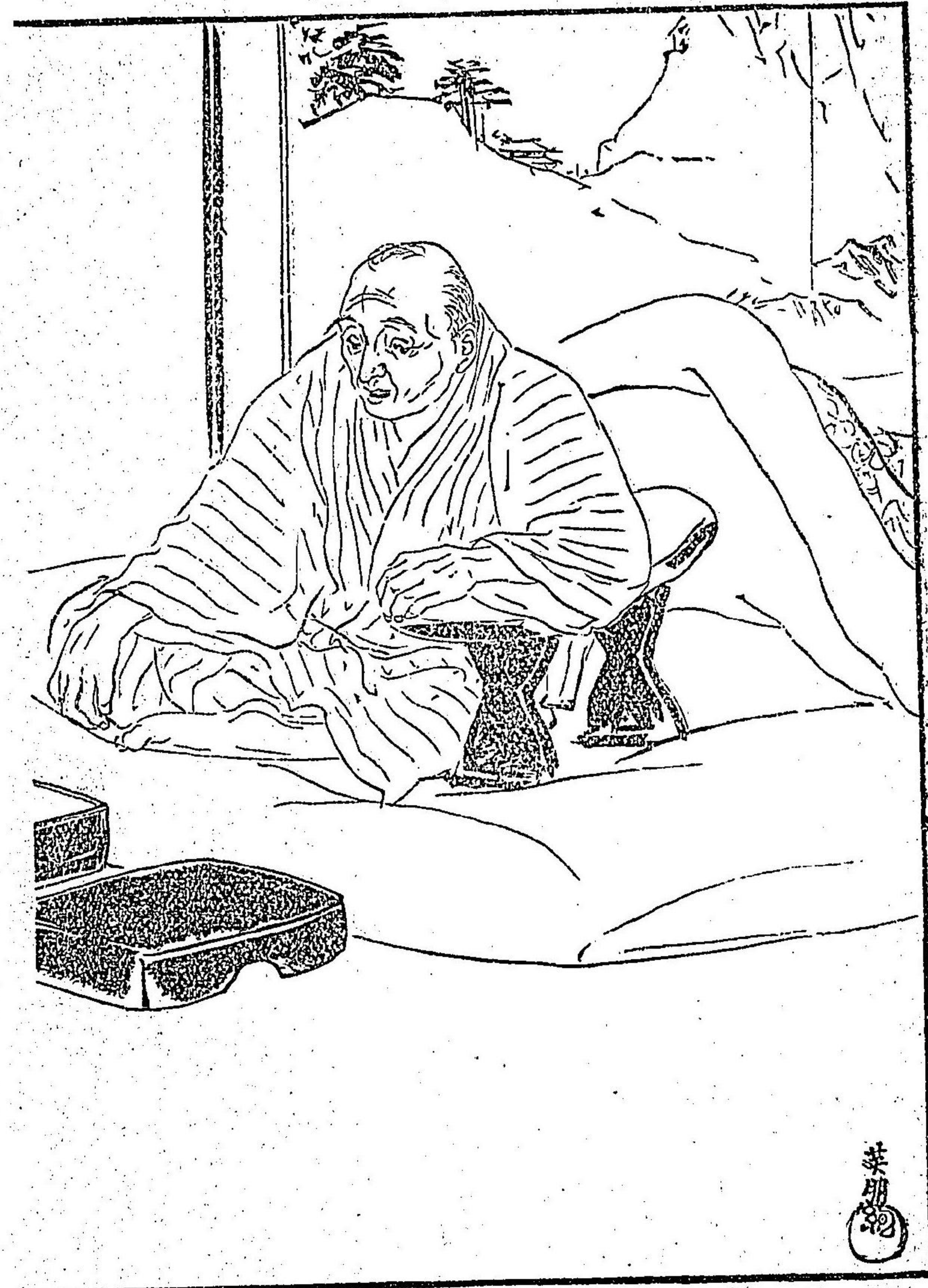
『今出て往かしやつたばかりの所で御座りやす。』

『何ういふ性質で、那道理の解らない奴だか困つた者だ。己はもう長くも生きまいから、彼奴の我儘な舉動や、亂暴れ散らすのを見るのも、僅の間だらうが、是れからお前達は、長い月日の間、惨な目に遇はないぢや成るまいと思つてな、……』

絶句して、遂に例のない溜息を洩らした。

紀知之丞は氣の毒らしい顔色で、異母の妹の手前もかね、

『阿母さんが、折々喧しく仰有るのは、別に惡氣の有るのでは御座りやすめえし。唯次郎が家を出て、那やつて今も身が定らずに居やすで、其れを心配して面白くない所から、諸事癢に障る所も有るので御座りやせう。』  
『爾だかとも思ひやすが、己母は何といふ人だか、阿爺が辛抱さつて、』



此の位に財産を拵えさつたお蔭で、皆人が樂にして往かれる恩も思はねえで、……………」

これは涙含んで面目ない様子。

『彼奴の意は、己が次郎を管ひつけねえのを怨んで、己を始め皆の者に當りちらすのかも知れねえが、幾等彼奴が亂暴れだからと云つて、道樂の資本に爲せようと思つて、己が財産は作つたのぢや無え。何うも詮方が無え。』と云つて少し途切れ、『馬鹿でも、癡愚でも、自分の血を分けた奴、不便に思はんでは、己ア無い、……………』

二人は口の出しやうも無いので、唯俯向いて畏まつて居る。

『次郎が身持が直つて、一人前の者に成つたら、何うかお前が爲て遣つて呉れ。見込の無い中は誰が何と云つても、管ひつけては成りませんぞ。その事も遺言状に詳しく書いて有るから、己が死んだら、親類立會の上で開封して呉れ。』

『はい。阿爺さんのお指圖通り致しやす。』

『阿登和や、お前其所を開けると手筈が在る筈だ、鳥渡出して呉れ。』

と『は』。

娘は袋戸から黒塗の手筈を、父の枕頭へ持つて來た。蓋を取らせて、中から垢染た紐附の革財布を摘み出して膝の上に載せ、昵と見遣つた。懷舊の情に堪へぬらしく、曾て無い涙を兩眼に浮べ、

『これはな、私が二十五の秋、唯三貫の錢を持つて、此の土地を飛出した時、頸に懸けて往つた財布だ。』

伴も娘も一心に、父の言葉に耳傾けて、古財布の上に瞳をあつめた。

『それから、越後の濱へ出て、漁師の仲間に入り、荒海の上で、命を的に稼いで居たのが、七八年よ。異人に雇はれて、獵虎狩船に乗つたり、朝鮮海で鯨漁船の海手に爲つて、辛い眼に遭つたのも、幾遍あるか知れねえ。もう死ぬのだと覺悟を決めたことも、二度や三度ぢやアなかつた。』

二人の子は熱心に老人の顔を見詰め、何か言はうと爲て、口を開き得なかつた。

「だが、運の神が護つて呉れたものと見え、不思議に命が續いたものだ。今の金に直すと、丁度、二千圓近い大金を貯めて、再び此の村へ歸つて來られたと云ふのは、自分ながら實に夢のやうだつたよ。」  
長い吐息を吐いて、涙を皴深い手の甲で拂つた。悽愴の氣の一段と眉宇の間に激し來たつたのが見え、語り繼がうと爲て、咳の込あげるのに惱んで居る。阿登和は後へ廻つて、脊中を撫りながら、

「少し横になつて休んだら宜かんべし。」  
と勞つたが頭を振り、

「否。大丈夫だ。何うも咳が出るので、些と困るが。何有、これ式の病氣に負けちやア居られねえ。若え時分、一丈五尺の艦を執つて、大颶風の正面に突立ち、山見るやうな波を乗切つた事を考へりやア、未却々此の老爺

動かねえもんだよ。」

肩を張つて利く方の腕を、枕の上に突出して見せる。けれども、左はぶらんく爲て居るので、折角の力みも、寧ろ氣の毒さを増すばかりである。  
「少しお薬を上がつて、靜に休みさつては、何うて御座りやす。お話は後で、又咳の出ない時に、緩々出來やせうし。」

老人は却々聽かぬ。

「今も忘れねえ、己が廿九の秋、八月の十七日だつたよ。佐渡沖で大颶風を食つて、脆い船だから溜らない。胴の間邊が微塵に碎けて、ドツ／＼と沙が入る。サアもう駄目だと、氣の早い奴は板子抱へて海へ躍込む。己も一緒に飛込まうとは思つたが、其の時まで稼ぎ溜めた金が、彼是三百兩。何うも棄てゝ置いて飛込むのが残念でならない。」  
眼を閉ぢて仰向きながら嘗時默し、

「幾何年の長い月日、骨を削り、命を賭け、死ぬ思ひで溜めた三百兩、今

此所でやみくも棄てるのは、何分残念で諦められ無かつた。人に知れない様に、船の艦に窃と隠して置いた奴を、波を被りながら潜つて行つて漸と取り出し、其れを此の財布に包んだ儘、緊密と禪へ結び附けた。』

『それから阿爺、何うなさりやした。』

恩はず二人が席を進めた。

『艦に重量が附いてるから、自由に泳げないのは知れて居る。飛込んでも直に疲れて死なねばならぬ。何うせ死ぬなら、船と一緒に沈む方が、己は死んでも金は世間に出まいものでも無いと思つて、艦の舵柱へ軀を縛つて、艀の追々沈んで往くのを、眺めた時はなア、……』息が詰つて、はらくと涙を翻した。兩人ともに言葉はなかつた。

『何とも云へない心細さで、唯かう一心に合掌して、金比羅様を念じて、一日一夜波に揺られ、風に揉まれ、死ぬのを待つて居た時の、心地と云ふものはなア、今も忘れやうたつて忘れられやア爲ない。』

『何うして、其れが助命りやしたので御座りやす。』

娘の方は感極つて言葉なく、落涙して居るのである。

『それが不思議にも翌朝になつて、佐渡の漁船に救ひあげられて、危い生命を拾つたのだが、其の舵柱に絡みついて、波を頭から被つて居た、一日一夜の間に己は沁々爾思つた。折角稼ぎ溜めた金を、斯う抱へて居ても、運が無ければ詮様がない。此の儘海の泡に爲て了ふまでだ。使つてさへ了へば、無慚々々世上の寶を棄てるにも當らなかつたのに、嗚呼悔しい事を爲た。使ふべき時に使ふのを、無闇に我慾に羈れさせて、身に着けてゐたのが災難。これさへ無くば泳ぎ出して助かれまいものでも無いが、と云つて棄てるのも未練で、思切つて擲出す氣にもなれなかつた。』

『それは爾でせうとも、長年辛抱して溜めさつた金だものなんし。』

『因て己は救命られてから、もう全然船乗が可厭になつて、金も相應に有るのだから、直に漁師はやめて、元の百姓になる氣で、此の土地へ戻つて



来たのだが、始終その時の考へが、頭に沁着いて脱れない。海の泡に爲て了ふ様な事では、幾等金を積んでも駄目だ。使ふ時に使ふべきは金だ。世上の寶を我慾一天張で、縛つて置いては、却て金が仇になつて、災難を受けるものだと、熟々己は思込んで居るのだ。』

『成程なんし。爾いふ事もあるべなんし。』

『先ア、危険い目に遭はさつたのに、能く阿爺、生きてゐて呉れさつて、善がツたなんし。』

談話とは云へ手に汗握つて聞いて居たので、漸と安堵の思ひを爲し、發と息を吐いたのである。老人は一刻、又痰の喉に絡むのに惱んで、苦氣に咳をする。

『痰の断れる薬を上げやせうかな、阿爺！持つて來やせうかなんし。』

『然か。ぢやア一つ飲まして呉れ。何うも咳が込あげると、喉を絞られる様で、腸が捲上がる。却々樂なものぢやア無い。』

阿登和は粉薬に水を添へて、老人に飲ませて遣つた。

『些と鎮靜いたやうだなんし。』

『いや、有難う。もう至極樂に爲つたやうだ。』

『先アお話は後になさつて、少し靜に休んだら、如何だべなんし。』

『否。何も差支へは無い。心配するに及ばないから、今少し聞て居て呉れ』

『お聞き申すのは、何時までも宜う御座りやすけんぞ……』

『阿爺が勞れさつたかと、兄さんが心配爲さつて、……』

『マア宜いから聞いて呉れ。今話した様な、九死一生の目に遭つて、舵柱に軀を縛へつけて、ざぶんぐ頭から波を被る、……』

『臍の邊を睨と抑へて、先方へ眼をジツと注ぎ、』斯う腹へつけた財布の上から、三百兩の金をぎうと擱んで、段々づうと斯う波へ沈んでゆく艀を眺めた、……サア其の時に胸に浮んだ、軀は到底助からないが、金だけは生して遣りたい。』と云ふ考へ。唯この一念が己の一代の事業の基に成つたのだ。那いふ事でも

無かつたら、世間普通の金満家のやうに、褌に絞附けて、金の息の根止める様な料簡を起し、火の中水の底まで、脊負てゆく氣になつて居たかも知れない。難有いことには、此の災難のお蔭で、金の尊さも使ひ道も始めて知つた。以後は何うか爲て金を生して遣りたい。金が活々と働いて、歡喜の聲をあげて、踊り廻るのが見たいと思つたのだ。己一人の寶ぢやない。闇から闇へ遣つては天罰が恐しいと、寐ても寤めても念じてゐるのだ。お前達も己の心を汲んで、財産を守り、世を渡るやうに爲て呉れ。阿爺が世話好きな道樂の爲に、遺産が少いなど、決して間違つた考へを起しては成りませんぞ。』

息繼續に語り終つて、枕の上に凭りかゝり、當時遭難の様を眼前に思ひ浮べて、恍然と爲し居る。

第六 驕

婦

勝手の方では阿塚が歸つて来たものと見え、下女下男や手代等を、口ぎたなく罵り叫く聲が、手に取るやうに聞える。病人の手前少しは氣を着けて、靜に爲て呉れ、ば宜いにと、伴も娘も内々心配して胸穩かならぬのである。病人も聞きつけたと見え、眉を擡めて、

『もう阿塚は歸つたものと見えるな。』

『はい、歸つて來さつた様だなんし。』

『何か阿母に用でも有りやすかい、阿爺?』

『否。何も用はないが、那には困ると思つてよ。お前達の前で、這麼話をするも可笑なものだが、世間では己が那いふ嫌を、追出しも爲ずに置いてゐるのを、意氣地が無いやうに、笑つて居る者もあるさうだが……、舵柱に絡みついた昔を思つてな、アツハ、その時の波の音だと思つて、辛抱して居たのよ。』

『阿母は何とも遠慮がない人で、病人が有つても何でも那だものなんし。』

氣の毒なと云ふ眼色で、夜着を直して遣つた。

『何時もの癖だから、詮方が無えなんし。』

『己はなア、那いふ嬢を持つて居て、其れて我慢を爲て、誰にも不足も云はず、愚癡も翻さずに暮したが、何うして斯う、平氣で居られると、人は不思議に思ふらしいが、其所は料簡の据る所次第だ。』

兩人『……………』

『人は樂を爲る氣に一旦なると、際限が無いものてな、萬事不足で疳癢が起る。苦を苦に爲ねえ程の強い氣を持つて、自分の志に眞向に進んで往けば、何も氣にはなら無いものだ。自分が他の者より上の方に心をつけて居れば、馬に乗つて犬に吠られる様なものて、氣には爲らない。却て吠つく奴等が可哀さうで、憫れんで遣らねばならぬ様に見えて来る。一緒になつて噛合ふやうては、もう詮方が無い。あッは、は、は。』

『阿爺が胸が廣いから、家が波風なく治まつて往くのだと、私達さへ始終』

爾思つて居りやす。』

『お前が阿母の悪口を云つて、怒られても困るが、那いふ性の人間は、心に刺が生へて居るやうな狀で、自分の氣を痛めるのも、大抵ぢやない。全く一代に何の位損だか知れない。教へて倅めさせる事の出来ないのは、己が器量が無いのと諦めるより外はあるまい。』

『同じ怒つて、何か言はつしやるに爲ても、もう些と穩かに爲て呉れさると宜いので御座りやすけんど。』

『もう阿母も那の年だもの、改めて貰ひたいと思ふ此方が無理で、傍が氣を附けて斟酌爲て、成るべく怒らせない様にするが第一だ。』

妹を宥めて遣つた。阿登和は又兄に何か言はうと爲て、口を開きかける途端、病室の入口に、足音荒く誰やら來た音がする。三人の胸には直に阿塚であると思つた。何れも顔を見合せて眉を蹙めた。仕切の襖を邪慳に開けて、づうと入つた。會釋もなく紀知右衛門の枕邊近く突立つて、三人の顔



を疥癩持らしい眼光で、ぢろく見おろし、「阿母只今お歸りなさりやしたか。」と伴と娘の挨拶するを耳にも入れず、無言の儘身動もせぬ。一體悪相と云ふては無く、年こそ五十の坂は越したが、縹緞は好い方。併し眉間の皺深く入りて、額の青筋蚯蚓の如く、吊上つた眼の悪光する様を見ては、毎日馴れて居る者の身に取つても、餘り心地よくは仰がれぬので、子供達は俯眼勝に俯向いた。紀知右衛門は眼を閉ぢて、臥して居た儘である。阿塚は例の可厭な響の疳癩聲で怒鳴始めた。

「親子三人集まつて、大方己が悪口の言競でも爲て居たんべし。看護婦と云ふ者も大金出して頼んで有るに、紀知之亟一阿登和！お前達は何と思つて、何の用があつて、彼方の仕事を打棄かして、此の病人にばかり掛つて居るだんべなア。」

病人は顔を擧めながら少し頭を擧げ、

「己が呼んだのだよ。お前何も若い者を、爾がみくく叱るにも當るまい。」

「否々、叱らなねぢやなんねえ。お前は明日にも死んで行く人だから、何とでも宜かんべし。己等は跡に残つて、家の始末を見ねえぢや成んねえから、子女等に爾我儘な眞似は、爲せちやア置かれねえがらッ。」

愈々調子は激烈になつた。紀知之亟は聞きづらいと見え、すうと外して出て了つた。

「阿母一阿父が斯うして煩つてるのに、もう些と靜に談話が出来べした。」

「何有、煩ッてゐたつて、お前、自分が好て村の手合に餘計な世話ア焼いて、頼まれも爲ねえ、誰も蔭では有難いとも云ひも爲ねえ事に、散々氣を揉んで快くなる病氣を悪くして了つたのなんだ。」

「頼まれない仕事に氣を揉むツたつて、それア阿母、他の事を爲て上げられる位の資財だから宜かんべした。」

「汝なんぞは黙つてろやい。今も己は見て來た、村の學校は那樣に立派に拵えて遣つて、自分が血を分けた次郎にやア、那の學校の十分の一の家を

建て、遣んべえても無え。何たる情のねえ人だらうと思つて、己等業が煮えてなんねえ。』

『お前が何様に怒鳴つても駄目だ。彼奴の身持の直らねえ中は、管ふことは成らねえ。己が資財は、蕩樂者に貢ぐ金は一文も無えのだからな。』

『フム、蕩樂者？ お前だつて役にも立たねえ、恩にも思はねえ村の者や、世間の者に、矢鱈無性に金を出して遣つて、何かを爲て追るでねえか、皆蕩樂と云ふもんで無えがよッ。』

私に「貴様見たいな道理の分らねえ者にやア、もう何にも言はねえから、勝手に怒鳴るが宜い。』

病人は寐反りして彼方向き、眼を堅く閉ぢて黙して了つた。阿登和は父の病氣に障りはせぬかと、惴々して安き心地も爲ない。けれど母の癖を知抜いてゐるので、止達を爲ては却て激させる許りと、是れも席を避けて逃出て了つた。

半時間餘り阿塚は病人の枕元に、立つたり坐つたり爲て、愚痴や怨言の百萬遍を唱へた。自分では善い氣に爲つて、世間の爲だの村繁昌の爲だのと云つて、林を植ゑて遣り、開墾に金を出し、學校や教員にも法外に貢いだり、貧乏人に怠惰賃を呉れたり爲て、並の金持とは些と違ふなど、力んだつて、世間の人は好い馬鹿だ、煽動に乗つて金を蒔く耆碌爺だと、笑つて居ると云ふ事。眼の前の見える所では、御恩は生涯忘れぬの、子々孫々に至る迄貴下の繪像を神棚に祀つて、朝夕忘れずに拜ませますのと、お座形のいゝ追従を嬉がつて、鼻毛を百姓連に讀れて居るとは、私娼買つて土蔵を潰す遊蕩兒よりも、癡愚の数が知れぬと暗いたり、今に棺桶に足を突込む年を爲て、名聞好や世間體や虚飾の爲に、折角貯へた金を臺無しにする。能く〜因果な老爺だと罵しつた。少し可哀な調子になつて、男の子は唯二人しか無い。其の季子の次郎が那やつて浪人を爲て、何處を家と云ふでも無く、漂泊いて困つて苦しんで居るのに、有剰る財産を分けて遣る氣

も無いとは、鬼の様な人だ。爪の垢程も親らしくも無い。無慈悲で吝嗇で不人情だ、など云ひたい法題な雑言を並べた。相手の管ひつけぬのを悔しがつて、果は獻欬げて洩瀉みませの譚話である。病夫は靜に眼を閉ぢて蝮の牙よりも鋭い老妻が罵聲の裏に横臥つて居る。彼れの呼吸は調整ひて平かなれど、其の眉の間には確に深き陰影の蟠まるのを見る。覺めて居るか夢みてゐるか、其の色褪せた唇は竟に開かれず了つた。

第七 唱 歌

舊歴て九月二十八日の夕方であつた。紀知右衛門は最後の近く迫つて居るのを豫知して、屋敷より程遠からぬ祖先代々の墳墓に、永訣の暇乞をかねて最終の参詣に行つた。其の歸途に、愛娘阿登和の肩に扶られ、杖に絶つて惱む歩みを運び、鎮守の杜の横手、杉の切株に暫時腰を卸して休んだ。落日の光幾疊の雲に溶け、金色流れて北より南へ、半天錦繡の海を漚へて、

山も林も燃るばかりの色眩し。社木寂しく瘦て水影の白き彼方に、此所には人ありとも知らで、一群の村の兒等が、競走輪廻し、さては鬼事などに餘念なく、嬉々として戯れる聲が、立枯の藪を隔て、聞かれた。  
 『あゝ漸とお墓詣りも濟ませて、己はな、阿登和！もう何も心に懸る事は無くなつたよ。今度は何時死んでも遺憾が無くて洞開と爲た。』  
 『死ぬなんて、尙那樣御心配を爲さる程の病氣でも御座りやすめえに。其れでも今日お墓詣を爲さつて宜う御座りやした。是れからは寒くなるし、滅多にお天氣の好い事は無えがらんし。』  
 『然だとも、是れも己の好運の一つだよ。』  
 『眞實に、何時から爾云つて居さつたのを、斯う好い時機に参詣の出來たのは結構で御座りやした。これて洒然爲さつたべし？』  
 『ウム。實に洒然して快い心地だ。もう何も遺憾が無く。』  
 『宜がツたなんし。』

「遺憾はもう無いがな。唯氣に懸るのは、阿塚と次郎が事ばかりだよ。」

「彼奴等が末を考へると、可哀さうでも有るし、又腹の立つやうにも思ふ。」

「然だなんし。」

「彼奴等の氣性を入れ換へる事が出来るものなら、家の財産を悉皆棄て、も惜かアないがなア。」

「でもねえ、阿爺！」

言ひかけて言ひ泣む。何か胸に塞えたと見える。

「己はなア、阿登和……………」

「はい。」

「以前は實に貧乏で人氣の悪かつた此の村を、今お前達が見る通、他村から羨まれる位、裕福で人氣の好い村に爲ても遣つたし、己が學校を建て、骨を折つた効には、他村には無え程豪い若い者も大分此の村から出たて、

一代苦勞したゞけの事が有つたと、内々喜んで居るものゝ、自分の女房子の根性を直す力も無えと、人に云はれて口の開きやうも無えのは、己ア實に面目次第も無え譯だのウ。」

「爾思はッしやるも、無理が無えので御座りやすけど、餘り心配爲さると毒だから、もう那樣ことは考へねえが宜う御座りやす。」

「己ア爾時々思ふよ。今まで苦勞して成功げた事業は、矢張三十年前に、佐渡の沖で三百兩の金と一緒に、海に沈んで了つたのと同じやうな事かも知れ無えと考へると情ない。七十年の手續を掛けたゞけが、却て損かも知れ無えと思つてな。」

「那樣ことが有んめえし、眼の開いてる人は皆知つて居やすもの。」

「人は種々に思ふのだから、世間は何う云はうと管はねえが、自分の心で迷ふ事があるでなア。情ない心地の爲る時も有るのよ。」

少時兩人の談話は途切れた。祠の方では子供達が、可愛い聲を揃へて歌ふ





唱歌が、暮れゆく鎮守の杜を通  
して朗かに聞える。

教への庭のともしび。

學びの道の御親よ。

その光の影あふぎ、

その功績思ひては、

山も低し海はた淺し、

謂ふすべ知らに唯涙

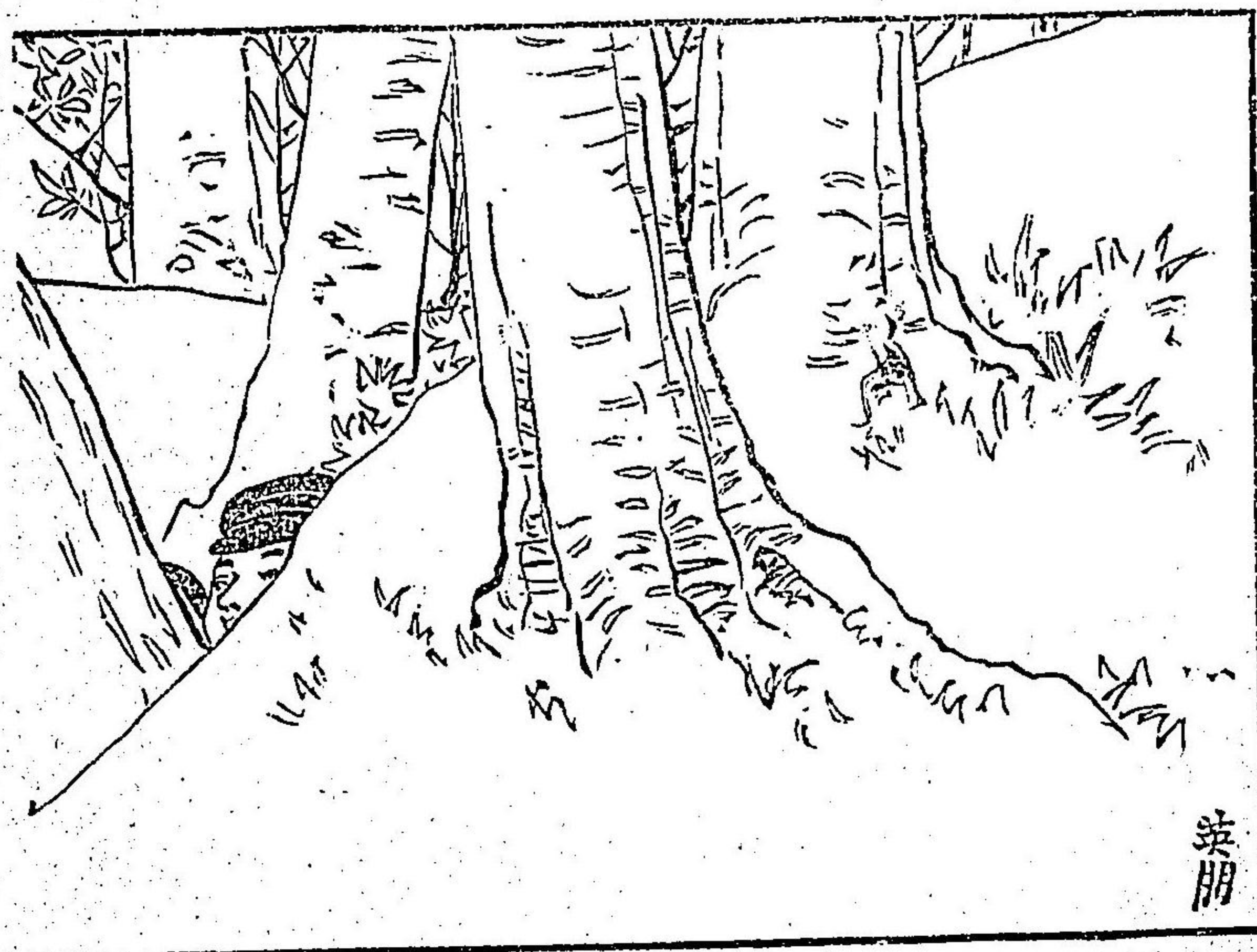
赤垣の大人の御名、

永久に忘れじな。

餘韻木魂を追うて消えて尙たゆ

たふ。

耳欝て、聞いて居た紀知右衛門

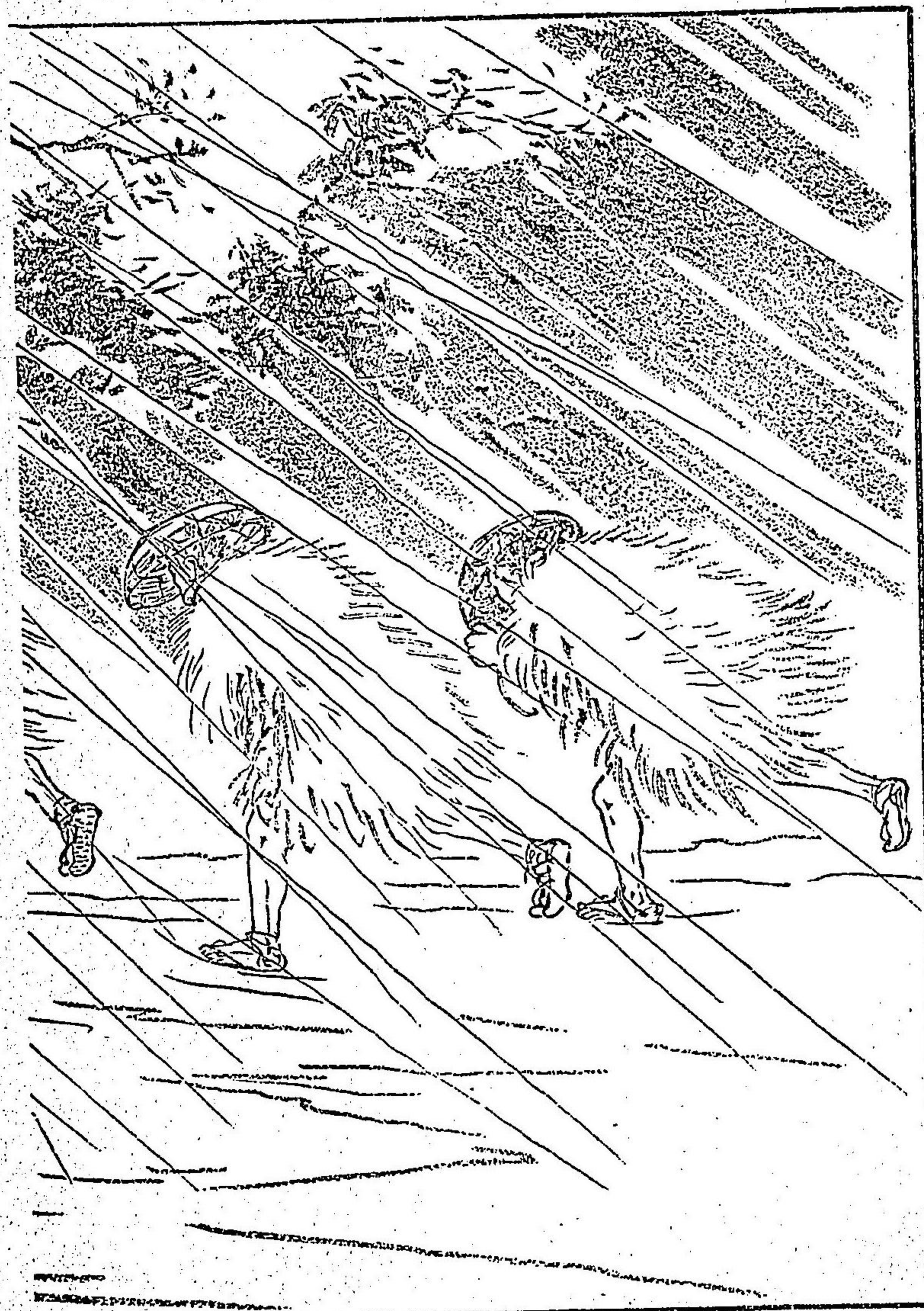
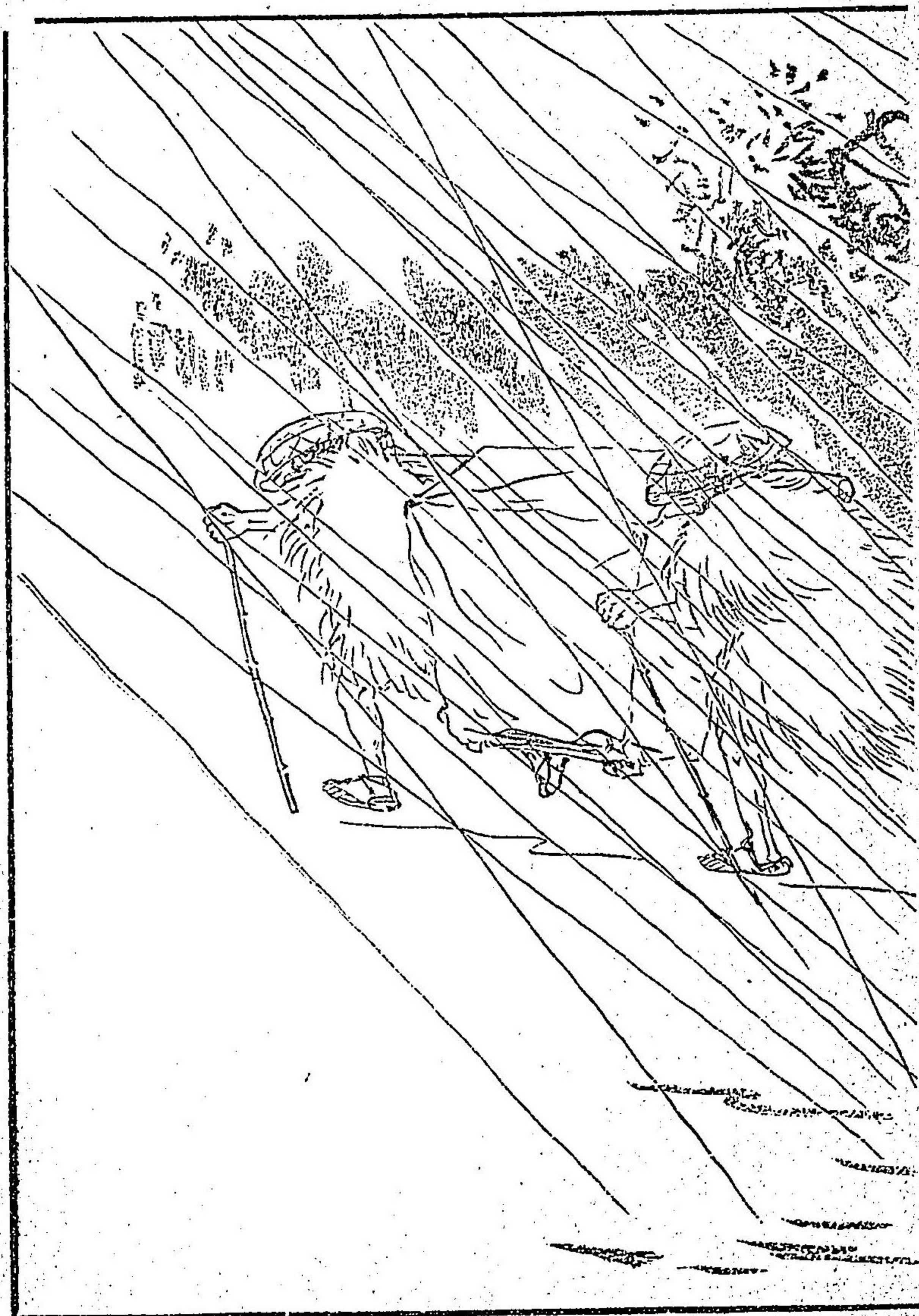


の顔には、温い微笑おのづから  
浮んで、何時の間にか眉根緩や  
かに暢びたのであつた。

### 第八 洪 水

紀知右衛門が墓參の後、一週間  
程経てのことであつた。車軸を  
流す様な雨が、晝夜降り續いて  
二日目の午後に至つて尙止まず、  
吾妻山系統の山々溪々より押寄  
せて来る水、長瀬川に集注して  
溢れ漲り、山手の村々は今や洪  
水に浸され、遠近相いましむる





警鐘亂打の聲と共に、橋落ち家流れ人畜溺れ、救ひを求めて叫喚號哭する響、物凄いとてあつた。我が赤埴村のみは不斷紀知右衛門が心を用ひ、金に飽かして築きあげた大堤防のお蔭で辛くも洪水の來襲を免がれた。けれど北の第一水門の際から少し潰れ始めた。油断を爲れば、全村今にも泥海にならうも知れぬ、との急報が村中に傳つた。此の警報が何時しか病牀に横臥つてゐる、紀知右衛門の耳にも入つた。彼れは殆ど全身不隨意の病軀を起して、

「駕籠を！ 駕籠を！」

と叫んだ。そして傍人の止めるも聽かず、蹶然と立ちあがつた。看護の人々は喫驚した。

「何を爲さりやす！」

「何う爲さつた？」

何れも怪んで靜に寐るやうにと勧めた。

「サア、早く駕籠の用意をさして呉れ！ 誰も止めてはならんぞ。己が最後の世話焼仕舞だ。」

彼れは家族の人々の哀願するが如く、言葉を悉して止めるのを擯け、頻死の病軀を駕籠に乗せ、猛雨の間を突いて北の水門口指して屈竟の男等に、

「ソレ急げ、駈ろ！」と嚴命を下しつゝ、揉れ揺られて擔き去られた。

紀知右衛門様が駕籠に乗つて、堤を防ぎに出られた。と村中に電光の如く傳つた。老若男女先を争うて水門口に駈けつけた。既に危く見える程、潰れかゝつた堤防も、紀知右衛門が病を力めての指圖と、村民が感激一致の働作とで、辛くも捍禦め得たのである。これが爲に長瀬川西岸一帯、幾百千の家屋と民命とを救ひ得たのである。けれど、彼れの病は此の激動の結果、果急に革まつて、家に歸り着いて間もなく、もう危篤に陥つて了つたのである。

(79)

終

臨



民

公

(78.)



第九 臨

終

到底明日までは無事に保つまいと、主治醫が悄然として言切つた。其の言葉が甲の口より乙の耳へと密語かれて、赤垣一家は何れも萎れ返つた。廣い屋敷の中には、高い咳拂一つ聞かれぬ程寂然と爲て居る。門を出入る人々の眼は皆憂を含んで、爾も其の歩調は匆忙しい。

病室の次を一室隔て、親類縁家の者殊恩を受けし儕輩、村内の重なる人々など、一同集まつて居る。が、互に垂たる頭、翠めた眉、濡る眼に限りなき哀惜の情を語り送して、高い聲一つ立てる者無く、何れも肅然として控へて居る。戸外には時雨しとくと降りて、空も何となう物愁しく、訪ひ來る人の傳の音、騒然く門前に止まるのも、閑寂と憂愁とを搖起す響のやう。

病室より足音抑へて、靜に立ち出づる白衣の看護婦を招き寄せ、額を集め

一「尚睡つたなりですかい？」

二「フム。脈は何うて御座りやす。お薬を吐瀉しなすつた？」

三「醫者は何う云つて居なさるだアね。」

四「眼が覺めてると、未口が利けやすッて。フム、ぢやア未死ぬ氣遣ひが有るめえし。」

五「それは困つた、到底今夜は越せまい？醫者が爾いふかね？」

看護婦の談話を聞く中、彼方此方で涙を拭む音もする、眼を蔽うて俯向いたのもあつた。

紀知右衛門は今まで我れにもあらず熟睡して、漸と眼が覺めて枕邊を眺めると、妻子や近親の誰彼病床の周圍を圍んで、突俯して微に飲泣をするのや、顔を袖に掩うて居たのも有る。醫者と看護婦とは左右より我が脈を取

つて、此等も皆泣屈折てゐる躰。因で勤ついた。「フム爾か。いよく己の臨終がもう来たな。」と思つて看護婦を促して抱起させ、蒲團の上に靜に坐らせて貰ひ、少時黙して此の世の名残に病室の周圍を見廻した。襖の模様も額も天井も疊も、其邊に在る調度も、今までに經驗ない壯嚴の色、千丈の虹、半天の落暉、こゝに宿るとばかり、唯この瞬時に全生涯の經歷が麗しい襤褸の如く眼前に展かれた。過去を歌ふ微妙の音聲の瞬かれるのを聞いた彼れは、微笑ながら、枕邊に居並ぶ人々の上に瞳を向けた。

「甚い長い間、お前達の世話になつてなア……」温かな涙の兩眼に浮ぶのが見られた。直に彼れは續けた。

「もうお暇乞だからな、お前達は互に和睦して、末繁昌に暮して呉れ！」

「御安堵なさりやす様……。」と言つたのは惣領の悴。

「はい、く。」と云つて歎歎に生躰ないのは阿登和。黙して泣伏しながら頭を上げ得ぬのは阿塚である。

その後紀知右衛門は昏睡に陥り、幾回か皮下注射を試みたれど効なく、追々脈搏細り躰温衰へ、翌朝の曉天に安らかなる死を遂げたのである。享年七十六。窓よりさす朝日やはらかに、病室を照せるころ、彼れの死顔の上に、尙微笑の影の微かに遺つて居るのが見られた。

公  
民(をはり)

明治四十三年三月十三日印刷  
明治四十三年三月十六日發行

定價金三十錢

著者 後藤寅之助

東京市本郷區四丁目八番地

發行者 阿部幸作

東京市京橋區弓町廿四番地

印刷者 金子久太郎

東京市京橋區弓町廿四番地

印刷所 三協印刷株式會社

東京市本郷區本郷四丁目八番地

發行所 有朋館

市內 東京堂、東海堂、六合館、上田屋、文林堂、二松堂、文

大賣捌所

地方

星堂、前川、大坂吉岡、名古屋川瀨、久留米菊竹、京都若林、新瀉西  
村、金澤宇都宮、函館魁文舍、松本水琴堂、其他各地書店

不許複製



260  
761

有朋館發兌圖書

○姉崎文學博士著

復活の曙光

定價金七十錢  
郵税金八錢

○本多庸一先生序  
○小河内綠氏著

偉人の青年時代

定價金四十錢  
郵税金六錢

○吉田文學士著

社會的倫理學

定價金八十錢  
郵税金八錢

○横井農學博士序  
○梶山家禽場主著

實養鶏百問答

定價金五十錢  
郵税金六錢

○加藤文學博士著

東比較宗教史

定價金七十五錢  
郵税金八錢

○後藤宙外先生著

教育公民

定價金三十錢  
郵税金四錢

○師範嘉納先生序  
○鈴木法學士著

柔道の眞髓

定價金三十五錢  
郵税金六錢

○三浦觀樹將軍題辭  
○阿部直道氏著

解六韜三略

定價金六十五錢  
郵税金八錢

